

2 人間会議 2017. 冬 (2017.12.5)

「パート1」科学を支える哲学

戦間期ウィーンと知識社会学 ——シュンペーターのいた時代

中山 智香子

東京外国語大学 大学院総合国際学研究院教授

技術革新(イノベーション)を論じた経済学者として折に触れ参照されるのは、ヨゼフ・アロイス・シュンペーター(一八八三—一九五〇)である。かれによれば、企業家は斬

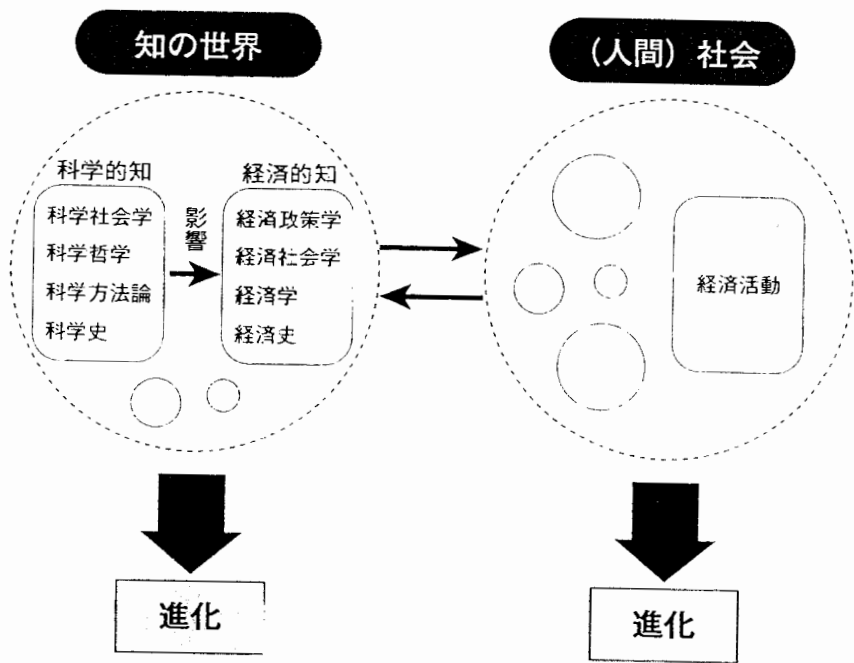
新なアイデアで銀行から資金を調達して事業を実現し、大きな利潤を得る。そこで多数の模倣者が追随し、経済にダイナミズムが生まれて経済発展が進展する。企業家あって

の経済発展だが、銀行の信用創造があつてこそアイデアはイノベーションになる。このような考え方は経済分析だけでなく、「知識が社会を動かす」というビジョンによって、知識社会学にも影響を与えてきた。本稿ではシュンペーターが生きた時代と場所に光を当て、肥沃な知的土壌がさらなる時代の知の源泉にもなった様相を素描する。

国際性・学際性が育んだ
オーストリア学派

シュンペーターが上記の分析を行った著作は『経済発展の理論』(初版一九二二年、第二版一九二六年)である。それは第一次世界大戦への緊張から開戦、敗戦を経てハプスブルグ帝国が崩壊し、敗戦後の新生小国オーストリアが二〇年あまりでま

図1 シンペーターにおける知と社会の関係



出典：編者谷祐一「シュンペーター的思考—総合的社会科学の構想」318頁の図から改変して筆者作成

た第二次世界大戦に至るといふ激動の戦間期にあたる。第一次大戦後、首都ウィーンは経済苦境に直面しつつも、前世紀末からの文化や芸術、哲学など豊かな知的土壌を引き継ぎ、優れた頭脳の集まる場所となった。社会科学に関しては、地続きのロシアで革命によりソビエト社会主義共和国連邦が誕生し、オーストリアでは、ときの連立政権をオーストロ・マルクス主義者が担ったこともあって、社会主義の可能性や市場の根本的な意味を問う社会主義計算論争が展開された。ウィーンは学際的な知的環境により、史上稀有な活況を呈したのである。

そもそも一九世紀後半以来ウィーン大学では、後にオーストリア学派と呼ばれることになる自由主義経済学者が講座を担当した。学派の初



オスカー・モルゲンシュテルン
鈴木光男氏所蔵

ここでひとたびシュンペーターに焦点を絞り、知識とその進化の考え方を整理しておこう。冒頭で述べた通り、経済発展の起点は企業家の革新的アイデアだが、その前提としてシュンペーターの生産概念が重要である。生産とは自然法則的な意味において何かを「創造」するものではなく、すでに存在する事物および過程や諸力を活用し、つまり多種多様に使ったり取り取り扱ったりし、あるいは場所を移動させたり、機械的、化学的過程などの作用を加えたりして、支配することである。シュンペーターにとって何かをつくることとは、無から有を生み出すのではなく、諸事物や諸力の相互関係を変更し、

外に求められた。商工会議所の一室や図書館、さらにはカフェへと場所を移しながら、石油会社の支店長、銀行家、弁護士、製造業者などさまざまな職業を持ったメンバークラスが活発に議論を行ったと、参加者の一人だったフリードリヒ・アウグスト・フォン・ハイエク（一八九九―一九九二）が回想している。

シュンペーター自身はこの時期、大蔵大臣や銀行の頭取の仕事に担って失敗しており、こうした集いには現れなかったが、ハイエクの渡米旅行のために書いてくれた紹介状は、米国での経済学者との出会いや交流に絶大な効力を発揮したそうである。シュンペーター自身も一九二〇年代後半にハーバード大学の客員教授となり、その後米国へと拠点を移す。これはむしろ新天地でゆたかな議論の

知と社会の進化

場を提供したのであった。

離れているものを結合させることだったのである。



ヨゼフ・アロイス・シュンペーター
出典：E. März, "Josef Alois Schumpeter: Forscher, Lehrer, und Politiker" (1983) より

代や第二世代は君主の教育係や官僚を務めたが、学界に君臨していたドイツの歴史的・倫理的・政策的経済学から袂を分かち、自然科学を範とする精密科学としての経済学を追究した。編集する学会誌は国際性を志向し、ドイツはもちろん欧米諸国やロシア移民の経済学者からも、ときには日本からも寄稿を受け、論者の立場は多様であった。シュンペーターも参加した二〇世紀初頭のゼミナールにはマルクス主義者も参加していた。やがてメンバークラスの多くが移民もしくは亡命する第四世代まで、さかんに論争や議論を行いつつ理論を確立したのであった。

シュンペーターの同年代人が主導した第三世代以降、大学の講座を継承した正教授らも成果をあげたが、教育や議論の場はむしろ大学の

論理の探求のゆくえ

ン論の知識社会学的構造を図式的に示すと、図のようになる。人間集団から成る社会と(図1右の楕円)、人間が世界を理解し把握する総体としての学問、思想など知の世界(図1左の楕円)が並列して存在する。社会の中には、諸事物や諸力の物質世界と対峙する経済活動の領域があり、知の世界の中には物質世界を分析する科学的知や、経済活動を分析する経済的知などがある。学問分野はさらに枝分かれし、歴史や方法論、政策学、科学社会学、経済社会学などがある。シュンペーターは歴史の重要性を強調した。社会と知の世界は互いに影響を与え合いながら、ゆっくりと進化し、有機的に変化していくとかれに考えたのである。

一九三〇年代には、科学と社会との関係のとりえ方が変化した。世界や社会を観察し記述するのが科学であるとしても、人間はその世界の一部分を構成しており、外側にいるわけではない。人間が思考を介して何か変化を起こせば社会、ひいては世界に影響するという点が、強調されるようになったのである。

シュンペーターも社会と知の相互作用を述べたが、ここで知は、世界の片隅の一部分でありつつ全体によって必ずしも完全に制御され切らないという自由を獲得する。自由はその部分性によってラディカルかつ寛容である。ポパーはこれを社会科学における主体の重要性ととらえ、ヴィトゲンシュタインは目と視野の関係から比喩的に考えた。モルゲンシュテルンは社会における知の吸収

しかし他方で戦間期ウィーンは、論理的パラドクスを考察し合理性や科学的論理を追究した実証哲学者集団のウィーン学団、哲学者カール・ポパー(一九〇二―一九四)、ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン(一八八九―一九五二)らを輩出し、彼らとの交流が第四世代のハイエクやオスカー・モルゲンシュテルン(一九〇二―七七)の知的成果を生んだ。ヴィトゲンシュタインはハイエクの遠縁の従兄にあたり、二人は大戦間期に何度か会って議論を行っている。

ハイエクは一九二七年にロックフェラー財団の財政援助を受けてウィーンに景気研究所を設立し所長となるが、数年後にモルゲンシュテル

と普及の過程を考察し、不確実性による社会変化の予測不可能性を説いた。ハイエクもこの時期、個人の知識は部分的であるがゆえに市場や社会にとって決定的であるという理論を展開した。それらはまるで、全体主義化する社会の中でかれらが守ろうとした知の最後の砦であるかのようであった。

戦後には、新オーストリア学派は米国で原理主義的な自由至上主義(リバタリアニズム)として台頭し、ゲーム理論は国家の戦略的安全保障論に取り込まれた。しかしたとえばハーバート・サイモン(一九一六―二〇〇一)は、社会や組織にむしろ適切なものとして限定的な合理性を理論化し、後に新シュンペーター主義の知識社会学に活かされた。ラディカルで寛容な自由の知は、人工知

ンに所長を引き継ぎ、英国にわたった。一九三〇年代以降、ドイツやオーストリアをはじめヨーロッパの政治状況は悪化の一途を辿り、かれらは文字通り頭脳一つで生きる糧を求めて拠点を求めて、「浮遊知識人」として生を模索した。その人脈からとりわけドイツ語圏と英米の知識文化とが融合し、戦後はおもな場を米国に移しつつ、思索は継続されたのである。モルゲンシュテルンは米国でフォン・ノイマン(一九〇三―五七)と出会い、数年にわたる緊密な知的協働の後に大著『ゲームの理論と経済行動』を刊行する。ノイマンはコンピュータや人工知能、核開発にも携わった天才だが、ゲーム理論誕生に触媒の役割を果たしたモルゲンシュテルンの存在は重要であり、その知的源泉はウィーンにあった。

能(AI)との共存が問われる現代世界にも、重要な示唆を与え続けている。

なかやま・ちかこ
1964年生まれ。早稲田大学大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学、ウィーン大学大学院経済学研究科博士課程修了(経済学博士)。現職での担当科目はグローバル・スタディーズ。著書に「経済戦争の理論―大戦間期ウィーンとゲーム理論」(勁草書房)等。

